天守物語

泉鏡花

青空文庫

時　不詳。ただし封建時代――晩秋。日没前より深更にいたる。

所　播州姫路。白鷺城の天守、第五重。

登場人物

天守夫人、富姫。（打見は二十七八）岩代国猪苗代、亀の城、亀姫。（二十ばかり）姫川図書之助。（わかき鷹匠）小田原修理。山隅九平。（ともに姫路城主武田播磨守家臣）十文字ヶ原、朱の盤坊。茅野ヶ原の舌長姥。（ともに亀姫の眷属）近江之丞桃六。（工人）桔梗。萩。葛。女郎花。撫子。（いずれも富姫の侍女）薄。（おなじく奥女中）女の童、禿、五人。武士、討手、大勢。

舞台。天守の五重。左右に柱、向って三方を廻廊下のごとく余して、一面に高く高麗べりの畳を敷く。紅の鼓の緒、処々に蝶結びして一条、これを欄干のごとく取りまわして柱に渡す。おなじ鼓の緒のひかえづなにて、向って右、廻廊の奥に階子を設く。階子は天井に高く通ず。左の方廻廊の奥に、また階子の上下の口あり。奥の正面、及び右なる廻廊の半ばより厚き壁にて、広き矢狭間、狭間を設く。外面は山岳の遠見、秋の雲。壁に出入りの扉あり。鼓の緒の欄干外、左の一方、棟甍、並びに樹立の梢を見す。正面おなじく森々たる樹木の梢。

女童三人――合唱――

ここはどこの細道じゃ、細道じゃ、
天神様の細道じゃ、細道じゃ。

――うたいつつ幕開く――

侍女五人。桔梗、女郎花、萩、葛、撫子。各名にそぐえる姿、鼓の緒の欄干に、あるいは立ち、あるいは坐て、手に手に五色の絹糸を巻きたる糸枠に、金色銀色の細き棹を通し、糸を松杉の高き梢を潜らして、釣の姿す。

女童三人は、緋のきつけ、唄いつづく。――冴えて且つ寂しき声。

少し通して下さんせ、下さんせ。
ごようのないもな通しません、通しません。
天神様へ願掛けに、願掛けに。
通らんせ、通らんせ。
唄いつつその遊戯をす。

薄　天守の壁の裡より出づ。壁の一劃はあたかも扉のごとく、自由に開く、この婦やや年かさ。鼈甲の突通し、御殿奥女中のこしらえ。

薄　鬼灯さん、蜻蛉さん。

女童一　ああい。

薄　静になさいよ、お掃除が済んだばかりだから。

女童二　あの、釣を見ましょうね。

女童三　そうね。

いたいけに頷きあいつつ、侍女等の中に、はらはらと袖を交う。

薄　（四辺を※す）これは、まあ、まことに、いい見晴しでございますね。

葛　あの、猪苗代のお姫様がお遊びにおいでございますから。

桔梗　お鬱陶しかろうと思いまして。それには、申分のございませんお日和でございますし、遠山はもう、もみじいたしましたから。

女郎花　矢狭間も、物見も、お目触りな、泥や、鉄の、重くるしい、外囲は、ちょっと取払っておきました。

薄　成程、成程、よくおなまけ遊ばす方たちにしては、感心にお気のつきましたことでございます。

桔梗　あれ、人ぎきの悪いことを。――いつ私たちがなまけましたえ。

薄　まあ、そうお言いの口の下で、何をしておいでだろう。二階から目薬とやらではあるまいし、お天守の五重から釣をするものがありますかえ。天の川は芝を流れはいたしません。富姫様が、よそへお出掛け遊ばして、いくら間があると申したって、串戯ではありません。

撫子　いえ、魚を釣るのではございません。

桔梗　旦那様の御前に、ちょうど活けるのがございませんから、皆で取って差上げようと存じまして、花を……あの、秋草を釣りますのでございますよ。

薄　花を、秋草をえ。はて、これは珍しいことを承ります。そして何かい、釣れますかえ。

女童の一人の肩に、袖でつかまって差覗く。

桔梗　ええ、釣れますとも、もっとも、新発明でございます。

薄　高慢なことをお言いでない。――が、つきましては、念のために伺いますが、お用いになります。……餌の儀でござんすがね。

撫子　はい、それは白露でございますわ。

葛　千草八千草秋草が、それはそれは、今頃は、露を沢山欲しがるのでございますよ。刻限も七つ時、まだ夕露も夜露もないのでございますもの。（隣を視る）御覧なさいまし、女郎花さんは、もう、あんなにお釣りなさいました。

薄　ああ、ほんにねえ。まったく草花が釣れるとなれば、さて、これは静にして拝見をいたしましょう。釣をするのに饒舌っては悪いと云うから。……一番だまっておとなしい女郎花さんがよく釣った、争われないものじゃないかね。

女郎花　いいえ、お魚とは違いますから、声を出しても、唄いましても構いません。――ただ、風が騒ぐと下可ませんわ。……餌の露が、ぱらぱらこぼれてしまいますから。ああ、釣れました。

薄　お見事。

と云う時、女郎花、棹ながらくるくると枠を巻戻す、糸につれて秋草、欄干に上り来る。さきに傍に置きたる花とともに、女童の手に渡す。

桔梗　釣れました。（おなじく糸を巻戻す。）

萩　あれ、私も……

花につれて、黄と、白、紫の胡蝶の群、ひらひらと舞上る。

葛　それぞれ私も――まあ、しおらしい。

薄　桔梗さん、棹をお貸しな、私も釣ろう、まことに感心、おつだことねえ。

女郎花　お待ち遊ばせ、大層風が出て参りました、餌が糸にとまりますまい。

薄　意地の悪い、急に激しい風になったよ。

萩　ああ、内廓の秋草が、美しい波を打ちます。

桔梗　そう云ううちに、色もかくれて、薄ばかりが真白に、水のように流れて来ました。

葛　空は黒雲が走りますよ。

薄　先刻から、野も山も、不思議に暗いと思っていた、これは酷い降りになりますね。

舞台暗くなる、電光閃く。

撫子　夫人は、どこへおいで遊ばしたのでございますえ。早くお帰り遊ばせば可うございますね。

薄　平時のように、どこへとも何ともおっしゃらないで、ふいとお出ましになったもの。

萩　お迎いにも参られませんねえ。

薄　お客様、亀姫様のおいでの時刻を、それでも御含みでいらっしゃるから、ほどなくお帰りでござんしょう。――皆さんが、御心入れの御馳走、何、秋草を、早くお供えなさるが可いね。

女郎花　それこそ露の散らぬ間に。――

正面奥の中央、丸柱の傍に鎧櫃を据えて、上に、金色の眼、白銀の牙、色は藍のごとき獅子頭、萌黄錦の母衣、朱の渦巻きたる尾を装いたるまま、荘重にこれを据えたり。

――侍女等、女童とともにその前に行き、跪きて、手に手に秋草を花籠に挿す。色のその美しき蝶の群、斉く飛連れてあたりに舞う。雷やや聞ゆ。雨来る。

薄　（薄暗き中に）御覧、両眼赫燿と、牙も動くように見えること。

桔梗　花も胡蝶もお気に入って、お嬉しいんでございましょう。

時に閃電す。光の裡を、衝と流れて、胡蝶の彼処に流るる処、ほとんど天井を貫きたる高き天守の棟に通ずる階子。――侍女等、飛ぶ蝶の行方につれて、ともに其方に目を注ぐ。

女郎花　あれ、夫人がお帰りでございますよ。

はらはらとその壇の許に、振袖、詰袖、揃って手をつく。階子の上より、まず水色の衣の褄、裳を引く。すぐに蓑を被ぎたる姿見ゆ。長なす黒髪、片手に竹笠、半ば面を蔽いたる、美しく気高き貴女、天守夫人、富姫。

夫人　（その姿に舞い縋る蝶々の三つ二つを、蓑を開いて片袖に受く）出迎えかい、御苦労だね。（蝶に云う。）

――お帰り遊ばせ、――お帰り遊ばせ――侍女等、口々に言迎う。――

夫人　時々、ふいと気まかせに、野分のような出歩行きを、……

ハタと竹笠を落す。女郎花、これを受け取る。貴女の面、凄きばかり白く※長けたり。

露も散らさぬお前たち、花の姿に気の毒だね。（下りかかりて壇に弱腰、廊下に裳。）

薄　勿体ないことを御意遊ばす。――まあ、お前様、あんなものを召しまして。

夫人　似合ったかい。

薄　なおその上に、御前様、お痩せ遊ばしておがまれます。柳よりもお優しい、すらすらと雨の刈萱を、お被け遊ばしたようにございます。

夫人　嘘ばっかり。小山田の、案山子に借りて来たのだものを。

薄　いいえ、それでも貴女がめしますと、玉、白銀、揺の糸の、鎧のようにもおがまれます。

夫人　賞められてちっと重くなった。（蓑を脱ぐ）取っておくれ。

撫子、立ち、うけて欄干にひらりと掛く。

蝶の数、その蓑に翼を憩う。……夫人、獅子頭に会釈しつつ、座に、褥に着く。脇息。

侍女たちかしずく。

少し草臥れましたよ。……お亀様はまだお見えではなかったろうね。

薄　はい、お姫様は、やがてお入りでござりましょう。それにつけましても、お前様おかえりを、お待ち申上げました。――そしてまあ、いずれへお越し遊ばしました。

夫人　夜叉ヶ池まで参ったよ。

薄　おお、越前国大野郡、人跡絶えました山奥の。

萩　あの、夜叉ヶ池まで。

桔梗　お遊びに。

夫人　まあ、遊びと言えば遊びだけれども、大池のぬしのお雪様に、

ちっと……頼みたい事があって。

薄　私はじめ、ここに居ります、誰ぞお使いをいたしますもの、御自分おいで遊ばして、何と、雨にお逢いなさいましてさ。

夫人　その雨を頼みに行きました。――今日はね、この姫路の城……ここから視れば長屋だが、……長屋の主人、それ、播磨守が、秋の野山へ鷹狩に、大勢で出掛けました。皆知っておいでだろう。空は高し、渡鳥、色鳥の鳴く音は嬉しいが、田畑と言わず駈廻って、きゃっきゃっと飛騒ぐ、知行とりども人間の大声は騒がしい。まだ、それも鷹ばかりなら我慢もする。近頃は不作法な、弓矢、鉄砲で荒立つから、うるささもうるさしさ。何よりお前、私のお客、この大空の霧を渡って奥でおいでのお亀様にも、途中失礼だと思ったから、雨風と、はたた神で、鷹狩の行列を追崩す。――あの、それを、夜叉ヶ池のお雪様にお頼み申しに参ったのだよ。

薄　道理こそ時ならぬ、急な雨と存じました。

夫人　この辺は雨だけかい。それは、ほんの吹降りの余波であろう。鷹狩が遠出をした、姫路野の一里塚のあたりをお見な。暗夜のような黒い雲、眩いばかりの電光、可恐い雹も降りました。鷹狩の連中は、曠野の、塚の印の松の根に、澪に寄った鮒のように、うようよ集って、あぶあぶして、あやい笠が泳ぐやら、陣羽織が流れるやら。大小をさしたものが、ちっとは雨にも濡れたが可い。慌てる紋は泡沫のよう。野袴の裾を端折って、灸のあとを出すのがある。おお、おかしい。（微笑む）粟粒を一つ二つと算えて拾う雀でも、俄雨には容子が可い。五百石、三百石、千石一人で食むものが、その笑止さと言ってはない。おかしいやら、気の毒やら、ねえ、お前。

薄　はい。

夫人　私はね、群鷺ヶ峰の山の端に、掛稲を楯にして、戻道で、そっと立って視めていた。そこには昼の月があって、雁金のように（その水色の袖を圧う）その袖に影が映った。影が、結んだ玉ずさのようにも見えた。――夜叉ヶ池のお雪様は、激いなかにお床しい、野はその黒雲、尾上は瑠璃、皆、あの方のお計らい。それでも鷹狩の足も腰も留めさせずに、大風と大雨で、城まで追返しておくれの約束。鷹狩たちが遠くから、松を離れて、その曠野を、黒雲の走る下に、泥川のように流れてくるに従って、追手の風の横吹。私が見ていたあたりへも、一村雨颯とかかったから、歌も読まずに蓑をかりて、案山子の笠をさして来ました。ああ、そこの蜻蛉と鬼灯たち、小児に持たして後ほどに返しましょう。

薄　何の、それには及びますまいと存じます。

夫人　いえいえ、農家のものは大切だから、等閑にはなりません。

薄　その儀は畏りました。お前様、まあ、それよりも、おめしかえを遊ばしまし、おめしものが濡れまして、お気味が悪うございましょう。

夫人　おかげで濡れはしなかった。気味の悪い事もないけれど、隔てぬ中の女同士も、お亀様に、このままでは失礼だろう。（立つ）着換えましょうか。

女郎花　ついでに、お髪も、夫人様

夫人　ああ、あげてもらおうよ。

夫人に続いて、一同、壁の扉に隠る。女童のこりて、合唱す

――

ここはどこの細道じゃ、細道じゃ。

天神様の細道じゃ、細道じゃ。

時に棟に通ずる件の階子を棟よりして入来る、岩代国麻耶郡猪苗代の城、千畳敷の主、亀姫の供頭、朱の盤坊、大山伏の扮装、頭に犀のごとき角一つあり、眼円かに面の色朱よりも赤く、手と脚、瓜に似て青し。白布にて蔽うたる一個の小桶を小脇に、柱をめぐりて、内を覗き、女童の戯るるを視つつ破顔して笑う

朱の盤　かちかちかちかち。

歯を噛鳴らす音をさす。女童等、走り近く時、面を差寄せ、大口開く。

もおう！（獣の吠ゆる真似して威す。）

女童一　可厭な、小父さん。

女童二　可恐くはありませんよ。

朱の盤　だだだだ。（濁れる笑）いや、さすがは姫路お天守の、富姫御前の禿たち、変化心備わって、奥州第一の赭面に、びくともせぬは我折れ申す。――さて、更めて内方へ、ものも、案内を頼みましょう。

女童三　屋根から入った小父さんはえ？

朱の盤　これはまた御挨拶だ。ただ、猪苗代から参ったと、ささ、取次、取次。

女童一　知らん。

女童三　べいい。（赤べろする。）

朱の盤　これは、いかな事――（立直る。大音に）ものも案内。

薄　どうれ。（壁より出迎う）いずれから。

朱の盤　これは岩代国会津郡十文字ヶ原青五輪のあたりに罷在る、奥州変化の先達、允殿館のあるじ朱の盤坊でござる。すなわち猪苗代の城、亀姫君の御供をいたし罷出ました。当お天守富姫様へ御取次を願いたい。

薄　お供御苦労に存じ上げます。あなた、お姫様は。

朱の盤　（真仰向けに承塵を仰ぐ）屋の棟に、すでに輿をばお控えなさるる。

薄　夫人も、お待兼ねでございます。

手を敲く。音につれて、侍女三人出づ。斉しく手をつく。

早や、御入らせ下さりませ。

朱の盤　（空へ云う）輿傍へ申す。此方にもお待うけじゃ。――姫君、これへお入りのよう、舌長姥、取次がっせえ。

階子の上より、真先に、切禿の女童、うつくしき手鞠を両袖に捧げて出づ。

亀姫、振袖、裲襠、文金の高髷、扇子を手にす。また女童、うしろに守刀を捧ぐ。あと圧えに舌長姥、古びて黄ばめる練衣、襷せたる紅の袴にて従い来る。

天守夫人、侍女を従え出で、設けの座に着く。

薄　（そと亀姫を仰ぐ）お姫様。

出むかえたる侍女等、皆ひれ伏す。

亀姫　お許し。

しとやかに通り座につく。と、夫人と面を合すとともに、双方よりひたと褥の膝を寄す。

夫人　（親しげに微笑む）お亀様。

亀姫　お姉様、おなつかしい。

夫人　私もお可懐い。――

――（間。）

女郎花　夫人。（と長煙管にて煙草を捧ぐ。）

夫人　（取って吸う。そのまま吸口を姫に渡す）この頃は、めしあがるそうだね。

亀姫　ええ、どちらも。（うけて、その煙草を吸いつつ、左の手にて杯の真似をす。）

夫人　困りましたねえ。（また打笑む。）

亀姫　ほほほ、貴女を旦那様にはいたすまいし。

夫人　憎らしい口だ。よく、それで、猪苗代から、この姫路まで――道中五百里はあろうねえ、……お年寄。

舌長姥　御意にござります。……海も山もさしわたしに、風でお運び遊ばすゆえに、半日路には足りませぬが、宿々を歩いましたら、五百里……されば五百三十里、もそっともござりましょうぞ。

夫人　ああね。（亀姫に）よく、それで、手鞠をつきに、わざわざここまでおいでだね。

亀姫　でございますから、お姉様は、私がお可愛うございましょう。

夫人　いいえ、お憎らしい。

亀姫　御勝手。（扇子を落す。）

夫人　やっぱりお可愛い。（その背を抱き、見返して、姫に附添える女童に）どれ、お見せ。（手鞠を取る）まあ、綺麗な、私にも持って来て下されば可いものを。

朱の盤　ははッ。（その白布の包を出し）姫君より、貴女様へ、お心入れの土産がこれに。申すは、差出がましゅうござるなれど、これは格別、奥方様の思召しにかないましょう。…何と、姫君。

（色を伺う。）

亀姫　ああ、お開き。お姉様の許だから、遠慮はない。

夫人　それはそれは、お嬉しい。が、お亀様は人が悪い、中は磐梯山の峰の煙か、虚空蔵の人魂ではないかい。

亀姫　似たもの。ほほほほほ。

夫人　要りません、そんなもの。

亀姫　上げません。

朱の盤　いやまず、（手を挙げて制す）おなかがよくてお争い、お言葉の花が蝶のように飛びまして、お美しい事でござる。……さて、此方より申す儀ではなけれども、奥方様、この品ばかりはお可厭ではござるまい。

包を開く、首桶。中より、色白き男の生首を出し、もとどりを掴んで、ずうんと据う。

や、不重宝、途中揺溢いて、これは汁が出ました。（その首、血だらけ）これ、姥殿、姥殿。

舌長姥　あいあい、あいあい。

朱の盤　御進物が汚れたわ。鱗の落ちた鱸の鰭を真水で洗う、手の悪い魚売人には似たれども、その儀では決してない。姥殿、此方、一拭い、清めた上で進ぜまいかの。

夫人　（煙管を手に支き、面正しく屹と視て）気遣いには及びません、血だらけなは、なおおいしかろう。

舌長姥　こぼれた羹は、埃溜の汁でござるわの、お塩梅には寄りませぬ。汚穢や、見た目に、汚穢や。どれどれ掃除して参らしょうぞ。（紅の袴にて膝行り出で、桶を皺手にひしと圧え、白髪を、ざっと捌き、染めたる歯を角に開け、三尺ばかりの長き舌にて生

首の顔の血をなめる）汚穢や、（ぺろぺろ）汚穢やの。（ぺろぺろ）汚穢やの、汚穢やの、ああ、甘味やの、汚穢やの、ああ、汚穢いぞの、やれ、甘味いぞのう。

朱の盤　（慌しく遮る）やあ、姥さん、歯を当てまい、御馳走が減りはせぬか。

舌長姥　何のいの。（ぐったりと衣紋を抜く）取る年の可恐しさ、近頃は歯が悪うて、人間の首や、沢庵の尻尾はの、かくやにせねば咽喉へは通らぬ。そのままの形では、金花糖の鯛でさえ、横噛りにはならぬ事よ。

朱の盤　後生らしい事を言うまい、彼岸は過ぎたぞ。——いや、奥方様、この姥が件の舌にて舐めまするると、鳥獣も人間も、とろとろと消えて骨ばかりになりますわ。……そりゃこそ、申さぬことではなかった。お土産の顔つきが、時の間に、細長うなりました。なれども、過失の功名、死んで変りました人相が、かえって、もとの面体に戻りました。……姫君も御覧ぜい。

亀姫　（扇子を顔に、透かし見る）ああ、ほんになあ。

侍女等一同、瞬きもせず熟と視る。誰も一口食べたそう。

薄　お前様——あの、皆さんも御覧なさいまし、亀姫様お持たせのこの首は、もし、この姫路の城の殿様の顔に、よく似ているではござんせぬか。

桔梗　真に、瓜二つでございますねえ。

夫人　（打頷く）お亀様、このお土産は、これは、たしか……

亀姫　はい、私が廂を貸す、猪苗代亀ヶ城の主、武田衛門之介の首でございますよ。

夫人　まあ、貴女。（間）私のために、そんな事を。

亀姫　構いません、それに、私がいたしたとは、誰も知りはしませんもの。私が城を出ます時はね、まだこの衛門之介はお妾の膝に凭掛って、酒を飲んでおりました。お大名の癖に意地が汚くってね、鯉汁を一口に食べますとね、魚の腸に針があって、それが、咽喉へささって、それで亡くなるのでございますから、今頃ちょうどそのお膳が出たぐらいでございますよ。（ふと驚く。扇子を落す）まあ、うっかりして、この咽喉に針がある。（もとどりを取って上ぐ）大変なことをした、お姉様に刺さったらどうしよう。

夫人　しばらく！　折角、あなたのお土産を、いま、それをお抜きだと、衛門之介も針が抜けて、蘇返ってしまいましょう。

朱の盤　いかさまな。

夫人　私が気をつけます。可うございます。（扇子を添えて首を受取る）お前たち、瓜を二つは知れたこと、この人はね、この姫路の城の主、播磨守とは、血を分けた兄弟よ。

侍女等目と目を見合わす。

ちょっと、獅子にお供え申そう。

みずから、獅子頭の前に供う。獅子、その牙を開き、首を呑む。

首、その口に隠る。

亀姫　（熟と視る）お姉様、お羨しい。

夫人　え。

亀姫　旦那様が、おいで遊ばす。

間。——夫人、姫と顔を合す、互に莞爾とす。

夫人　嘘が真に。……お互に……

亀姫　何の不足はないけれど、

夫人　こんな男が欲いねえ。――ああ、男と云えば、お亀様、あなたに見せるものがある。――桔梗さん。

桔梗　はい。

夫人　あれを、ちょっと。

桔梗　畏まりました。（立つ。）

朱の盤　（不意に）や、姥殿、獅子のお頭に見惚れまい。尾籠千万。舌長姥　（時に、うしろ向きに乗出して、獅子頭を視めつつあり）

老人じゃ、当館奥方様も御許され。見惚れるに無理はないわいの。朱の盤　いやさ、見惚れるに仔細はないが、姥殿、姥殿はそこに居て舌が届く。（苦笑す。）

舌長姥思わず正面にその口を蔽う。侍女等忍びやかに皆笑う。

桔梗、鍬形打ったる五枚錣、金の竜頭の兜を捧げて出づ。夫人と亀姫の前に置く。

夫人　貴女、この兜はね、この城の、播磨守が、先祖代々の家の宝で、十七の奥蔵に、五枚錣に九ツの錠を下して、大切に秘蔵をしておりますのをね、今日お見えの嬉しさに、実は、貴女に上げましょうと思って取出しておきました。けれども、御心入の貴女のお土産で、私のはお恥しくなりました。それだから、ただ思っただけの、申訳に、お目に掛けますばかり。

亀姫　いいえ、結構、まあ、お目覚しい。

夫人　差上げません。第一、あとで気がつきますとね、久しく蔵込んであって、かび臭い。蘭麝の薫も何にもしません。大阪城の落ちた時の、木村長門守の思切ったようなのだと可いけれど、……勝戦のうしろの方で、矢玉の雨宿をしていた、ぬくいのらしい。御覧なさい。

亀姫　（鉢金の輝く裏を返す）ほんに、討死をした兜ではありませんね。

夫人　だから、およしなさいまし、葛や、しばらくそこへ。

指図のまま、葛、その兜を獅子頭の傍に置く。

お帰りまでに、きっとお気に入るものを調えて上げますよ。

亀姫　それよりか、お姉様、早く、あのお約束の手鞠を突いて遊びましょうよ。

夫人　ああ、遊びましょう。――あちらへ。――城の主人の鷹狩が、雨風に追われ追われて、もうやがて大手さきに帰る時分、貴女は沢山お声がいいから、この天守から美しい声が響くと、また立騒いでお煩い。

亀姫のかしずきたち、皆立ちかかる。

いや、御先達、お山伏は、女たちとここで一献お汲みがよいよ。

朱の盤　吉祥天女、御功徳でござる。（肱を張って叩頭す。）

亀姫　ああ、姥、お前も大事ない、ここに居てお相伴をしや。――お姉様に、私から我儘をしますから。

夫人　もっともさ。

舌長姥　もし、通草、山ぐみ、山葡萄、手造りの猿の酒、山蜂の蜜、蟻の甘露、諸白もござります、が、お二人様のお手鞠は、唄を聞きますばかりでも寿命の薬と承る。かように年を取りますと、慾も、得も、はは、覚えませぬ。ただもう、長生がしとうござりましてのう。

朱の盤　や、姥殿、その上のまた慾があるかい。

舌長姥　憎まれ山伏、これ、帰り途に舐められさっしゃるな。（とぺろりと舌。）

朱の盤　（頭を抱う）わあ、助けてくれ、角が縮まる。

侍女たち笑う。

舌長姥　さ、お供をいたしましょうの。

夫人を先に、亀姫、薄と女の童等、皆行く。五人の侍女と朱の盤あり。

桔梗　お先達、さあさあ、お寛ぎなさいまし。

朱の盤　寛がいで何とする。やあ、えいとな。

萩　もし、面白いお話を聞かして下さいましな。

朱の盤　聞かさいで何とする。（扇を笏に）それ、山伏と言っぱ山伏なり。兜巾と云っぱ兜巾なり。お腰元と言っぱ美人なり。恋路と言っぱ闇夜なり。野道山路厭いなく、修行積んだる某が、このいら高の数珠に掛け、いで一祈り祈るならば、などか利験のなかるべき。橋の下の菖蒲は、誰が植えた菖蒲ぞ、ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼんのぼろぼん。

侍女等わざとはらはらと逃ぐ、朱の盤五人を追廻す。

ぼろぼんぼろぼん、ぼろぼんぼろぼん。（やがて侍女に突かれて※と倒る）などか利験のなかるべき。

葛　利験はござんしょうけれどな、そんな話は面白うござんせぬ。

朱の盤　（首を振って）ぼろぼん、ぼろぼん。

鞠唄聞ゆ。

——私が姉さん三人ござる、一人姉さん鼓が上手。

一人姉さん太鼓が上手。

いっちよいのが下谷にござる。

下谷一番達しゃでござる。二両で帯買うて、

三両で括けて、括けめ括けめに七総さげて、

折りめ折りめに、いろはと書いて。——

葛　さあ、お先達、よしの葉の、よい女郎衆ではござんせぬが、参ってお酌。（扇を開く。）

朱の盤　ぼろぼんぼろぼん。（同じく扇子にうく）おととと、ちょうどあるちょうどある。いで、お肴を所望しょう。……などか利験のなかるべき。

桔梗　その利験ならござんしょう。女郎花さん、撫子さん、ちょっと、お立ちなさいまし。

両女立つ。

ここをどこぞと、もし人問わば、ここは駿河の府中の宿よ、人に情を掛川の宿よ。雉子の雌鳥ほろりと落いて、打ちきせて、しめて、しょのしょのいとしよの、そぞろいとしゅうて、遣瀬なや。

朱の盤　やんややんや。

女郎花　今度はお先達、さあ。

葛　貴方がお立ちなさいまし。

朱の盤　ぼろぼん、ぼろぼん。此方衆思ざしを受きょうならば。

侍女五人扇子を開く、朱の盤杯を一順す。すなわち立つ。腰なる太刀をすらりと抜き、以前の兜を切先にかけて、衝と天井に翳し、高脛に拍子を踏んで——

戈※剣戟を降らすこと電光の如くなり。

盤石巌を飛ばすこと春の雨に相同じ。

然りとはいえども、天帝の身には近づかで、

修羅かれがために破らる。

——お立ち——、（陰より諸声。）

手早く太刀を納め、兜をもとに直す、一同つい居る。

亀姫　お姉様、今度は貴方が、私へ。

夫人　はい。

舌長姥　お早々と。

夫人　（頷きつつ、連れて廻廊にかかる。目の下遥に瞰下す）ああ、鷹狩が帰って来た。

亀姫　（ともに、瞰下す）先刻私が参る時は、蟻のような行列が、その鉄砲で、松並木を走っていました。ああ、首に似た殿様が、馬に乗って反返って、威張って、本丸へ入って来ますね。

夫人　播磨守さ。

亀姫　まあ、翼の、白い羽の雪のような、いい鷹を持っているよ。

夫人　おお。（軽く胸を打つ）貴女。（間）あの鷹を取って上げましょうね。

亀姫　まあ、どうしてあれを。

夫人　見ておいで、それは姫路の、富だもの。

蓑を取って肩に装う、美しき胡蝶の群、ひとしく蓑に舞う。颯と翼を開く風情す。

それ、人間の目には、羽衣を被た鶴に見える。

ひらりと落す特、一羽の白鷹颯と飛んで天守に上るを、手に捕う。

――わっと云う声、地より響く――

亀姫　お涼しい、お姉様。

夫人　この鷹ならば、鞠を投げてもとりましょう。――沢山お遊びなさいまし。

亀姫　あい。（嬉しげに袖に抱く。そのまま、真先に階子を上る。二三段、と振返りて、衝と鷹を雪の手に据うるや否や）虫が来た。云うとともに、袖を払って一筋の征矢をカラリと落す。矢は鷹狩の中より射掛けたるなり。

夫人　（斉しくともに）む。（と肩をかわし、身を捻って背向になる、舞台に面を返す時、口に一条の征矢、手にまた一条の矢を取る。下より射たるを受けたるなり）推参な。

――たちまち鉄砲の音、あまたたび――

薄　それ、皆さん。

侍女等、身を垣にす。

朱の盤　姥殿、確り。（姫を庇うて大手を開く。）

亀姫　大事ない、大事ない。

夫人　（打笑む）ほほほ、皆が花火線香をお焚き――そうすると、鉄砲の火で、この天守が燃えると思って、吃驚して打たなくなるから。

――舞台やや暗し。鉄砲の音止む――

夫人、亀姫と声を合せて笑う、ほほほほほ。

夫人　それ、御覧、ついでにその火で、焼けそうな処を二三処焚くが可い、お亀様の路の松明にしようから。

舞台暗し。

亀姫　お心づくしお嬉しや。さらば。

夫人　さらばや。

寂寞、やがて燈火の影に、うつくしき夫人の姿。舞台にただ一人のみ見ゆ。夫人うしろむきにて、獅子頭に対し、机に向い巻ものを読みつつあり。間を置き、女郎花、清らかなる小掻巻を持ち出で、静に夫人の背に置き、手をつかえて、のち去る。―

―

ここはどこの細道じゃ、細道じゃ。

天神様の細道じゃ、細道じゃ。

舞台一方の片隅に、下の四重に通ずべき階子の口あり。その口より、まず一の雪洞頭れ、一廻りあたりを照す。やがて衝と翳すとともに、美丈夫、秀でたる眉に勇壮の気満つ。黒羽二重の紋着、萌黄の袴、臘鞘の大小にて、姫川図書之助登場。唄をききつつ低徊し、天井を仰ぎ、廻廊を窺い、やがて燈の影を視て、やや驚く。ついで几帳を認む。彼が入るべき方に几帳を立つ。図書は躊躇の後決然として進む。瞳を定めて、夫人の姿を認む。剣夾に手を掛け、気構えたるが、じりじりと退る。

夫人　（間）誰。

図書　はっ。（と思わず膝を支く）某。

夫人　（面のみ振向く、――無言。）

図書　私は、当城の大守に仕うる、武士の一人でございます。

夫人　何しに見えた。

図書　百年以来、二重三重までは格別、当お天守五重までは、生あるものの参った例はありませぬ。今宵、大殿の仰せに依って、私、見届けに参りました。

夫人　それだけの事か。

図書　且つまた、大殿様、御秘蔵の、日本一の鷹がそれまして、お天守のこのあたりへ隠れました。行方を求めよとの御意でございます。

夫人　翼あるものは、人間ほど不自由ではない。千里、五百里、勝手な処へ飛ぶ、とお言いなさるが可い。――用はそれだけか。

図書　別に余の儀は承りませぬ。

夫人　五重に参って、見届けた上、いかが計らえとも言われなかったか。

図書　いや、承りませぬ。

夫人　そして、お前も、こう見届けた上に、どうしようとも思いませぬか。

図書　お天守は、殿様のものでございます。いかなる事がありましょうとも、私一存にて、何と計らおうとも決して存じませぬ。

夫人　お待ち。この天守は私のものだよ。

図書　それは、貴方のものかも知れませぬ。また殿様は殿様で、御自分のものだと御意遊ばすかも知れませぬ。しかし、いずれにいたせ、私のものでないことは確でございます。自分のものでないものを、殿様の仰せも待たずに、どうしようとも思いませぬ。

夫人　すずしい言葉だね、その心なれば、ここを無事で帰られよう。

図書　私も無事に帰してあげます。

図書　冥加に存じます。

夫人　今度は、播磨が申しきけても、決して来てはなりません。ここは人間の来る処ではないのだから。――また誰も参らぬように。

図書　いや、私が参らぬ以上は、五十万石の御家中、誰一人参りますものはございますまい。皆生命が大切でございますから。

夫人　お前は、そして、生命は欲しゅうなかったのか。

図書　私は、仔細あって、殿様の御不興を受け、お目通を遠ざけられ閉門の処、誰もお天守へ上りますものがないために、急にお呼出しでございました。その御上使は、実は私に切腹仰せつけの処を、急に御模様がえになったのでございます。

夫人　では、この役目が済めば、切腹は許されますか。

図書　そのお約束でございました。

夫人　人の生死は構いませんが、切腹はさしたくない。私は武士の切腹は嫌いだから。しかし、思い掛なく、お前の生命を助けました。……悪い事ではない。今夜はいい夜だ。それではお帰り。

図書　姫君。

夫人　まだ、居ますか。

図書　は、恐入った次第ではございますが、御姿を見ました事を、主人に申まして差支えはございませんか。

夫人　確にお言いなさいまし。留守でなければ、いつでも居るから。

図書　武士の面目に存じます——御免。

雪洞を取って静に退座す。夫人長煙管を取って、払く音に、図書板敷にて一度留まり、直ちに階子の口にて、燈を下に、壇に隠る。

鐘の音。

時に一体の大入道、面も法衣も真黒なるが、もの陰より甍を渡り梢を伝うがごとくにして、舞台の片隅を伝い行き、花道なる切穴の口に踞まる。

鐘の音。

図書、その切穴より立顕る。

夫人すっと座を立ち、正面、鼓の緒の欄干に立ち熟と視る時、図書、雪洞を翳して高く天守を見返す、トタンに大入道さし覗きざまに雪洞をふっと消す。図書身構す。大入道、大手を拡げてその前途を遮る。

鐘の音。

侍女等、凜々しき扮装、揚幕より、懐剣、薙刀を構えて出づ。

図書扇子を抜持ち、大入道を払い、懐剣に身を躱し、薙刀と丁と合わす。かくて一同を追込み、揚幕際に扇を揚げ、屹と天守を仰ぐ。

鐘の音。

夫人、従容として座に返る。図書、手探りつつもとの切穴を捜る。（間）その切穴に没す。しばらくして舞台なる以前の階子の口より出づ。猶予わず夫人に近づき、手をつく。

夫人　（先んじて声を掛く。穏に）また見えたか。

図書　はっ、夜陰と申し、再度御左右を騒がせ、まことに恐入りました。

夫人　何しに来ました。

図書　御天守の三階中壇まで戻りますと、鳶ばかり大さの、野衾かと存じます、大蝙蝠の黒い翼に、燈を煽ぎ消されまして、いかにとも、進退度を失いましたにより、灯を頂きに参りました。

夫人　ただそれだけの事に。……二度とおいでないと申した、私の言葉を忘れましたか。

図書　針ばかり片割月の影もささず、下に向えば真の暗黒。男が、足を踏みはずし、壇を転がり落ちまして、不具になどなりましては、生効もないと存じます。上を見れば五重のここより、幽にお燈がさしました。お咎めをもって生命をめさりようとも、男といたし、階子から落ちて怪我をするよりはと存じ、御戒をも憚らず推参いたしてございます。

夫人　（莞爾と笑む）ああ、爽かなお心、そして、貴方はお勇しい。燈を点けて上げましょうね。（座を寄す。）

図書　いや、お手ずからは恐多い。私が。

夫人　いえいえ、この燈は、明星、北斗星、竜の燈、玉の光もおなじこと、お前の手では、蝋燭には点きません。

図書　ははッ。（瞳を凝す。）

夫人、世話めかしく、雪洞の蝋を抜き、短繁の灯を移す。燭をとって、熟と図書の面を視る、恍惚とす。

夫人　（蝋燭を手にしたるまま）帰したくなくなった、もう帰すまいと私は思う。

図書　ええ。

夫人　貴方は、播磨が貴方に、切腹を申しつけたと言いました。それは何の罪でございます。

図書　私が拳に据えました、殿様が日本一とて御秘蔵の、白い鷹を、このお天守へ逸しました、その越度、その罪過でございます。

夫人　何、鷹をそらした、その越度、その罪過、ああ人間というものは不思議な咎を被せるものだね。その鷹は貴方が勝手に鳥に合せたのではありますまい。天守の棟に、世にも美しい鳥を視て、それが欲しさに、播磨守が、自分で貴方にいいつけて、勝手に自分でそらしたものを、貴方の罪にしますのかい。

図書　主と家来でございます。仰せのまま生命をさし出しますのが臣たる道でございます。

夫人　その道は曲っていましょう。間違ったいいつけに従うのは、主人に間違った道を踏ませるのではありませんか。

図書　けれども、鷹がそれました。

夫人　ああ、主従とかは可恐しい。鷹とあの人間の生命とを取かえるのでございますか。よしそれも、貴方が、貴方の過失なら、君と臣というもののそれが道なら仕方がない。けれども、播磨がさしずなら、それは播磨の過失というもの。第一、鷹を失ったのは、貴方ではありません。あれは私が取りました。

図書　やあ、貴方が。

夫人　まことに。

図書　ええ、お怨み申上ぐる。（刀に手を掛く。）

夫人　鷹は第一、誰のものだと思います。鷹には鷹の世界がある。露霜の清い林、朝嵐夕風の爽かな空があります。決して人間の持ちものではありません。諸侯なんどというものが、思上った行過ぎな、あの、鷹を、ただ一人じめに自分のものと、つけ上りがしています。貴方はそうは思いませんか。

図書　（沈思す、間）美しく、気高い、そして計り知られぬ威のある、姫君。――貴方にはお答が出来かねます。

夫人　いえ、いえ、かどだてて言籠めるのではありません。私の申すことが、少しなりともお分りになりましたら、あのその筋道の分らない二三の丸、本丸、太閤丸、廓内、御家中の世間へなど、もうお帰りなさいますな。白銀、黄金、球、珊瑚、千石万石の知行より、私が身を捧げます。腹を切らせる殿様のかわりに、私の心を差上げます、私の生命を上げましょう。貴方お帰りなさいますな。

図書　迷いました、姫君。殿に金鉄の我が心も、波打つばかり悩乱をいたします。が、決心が出来ません。私は親にも聞きたし、師にも教えられたし、書もつにも聞かねばなりません。お暇を申上げます。

夫人　（歎息す）ああ、まだ貴方は、世の中に未練がある。それで

はお帰りなさいまし。（この時蝋燭を雪洞に）はい。

図書　途方に暮れつつ参ります。迷の多い人間を、あわれとばかり思召せ。

夫人　ああ、優しいそのお言葉で、なお帰したくなくなった。（袂を取る。）

図書　（屹として袖を払う）強いて、たって、お帰しなくば、お抵抗をいたします。

夫人　（微笑み）あの私に。

図書　おんでもない事。

夫人　まあ、お勇ましい、凛々しい。あの、獅子に似た若いお方、お名が聞きたい。

図書　夢のような仰せなれば、名のありなしも覚えませぬが、姫川図書之助と申します。

夫人　可懐い、嬉しいお名、忘れません。

図書　以後、お天守下の往かいには、誓って礼拝をいたします。——御免。（衝と立つ。）

夫人　ああ、図書様、しばらく。

図書　是非もない、所詮活けてはお帰しない掟なのでございますか。

夫人　ほほほ、播磨守の家中とは違います。ここは私の心一つ、掟なぞは何にもない。

図書　それを、お呼留め遊ばしたは。

夫人　おはなむけがあるのでござんす。——人間は疑深い。卑怯な、臆病な、我儘な、殿様などはなおの事。貴方がこの五重へ上って、この私を認めたことを誰もほんとうにはせぬであろう。清い、爽かな貴方のために、記念の品をあげましょう。（静に以前の兜を取る）——これを、その記念にお持ちなさいまし。

図書　存じも寄らぬ御たまもの、姫君に向い、御辞退はかえって失礼。余り尊い、天晴な御兜。

夫人　金銀は堆けれど、そんなにいい細工ではありません。しかし、武田には大切な道具。——貴方、見覚えがありますか。

図書　（疑の目を凝しつつあり）まさかとは存ずるなり、私とても年に一度、虫干の外には拝しませぬが、ようも似ました、お家の重宝、青竜の御兜。

夫人　まったく、それに違いありません。

図書　（愕然とす。急に）これにこそ足の爪立つばかり、心急ぎがいたします、御暇を申うけます。

夫人　今度来ると帰しません。

図書　誓って、——仰せまでもありません。

夫人　さらば。

図書　はっ。（兜を捧げ、やや急いで階子に隠る。）

夫人　（ひとりもの思い、机に頬杖つき、獅子にもの言う）貴方、あの方を——私に下さいまし。

薄　（静に出づ）お前様。

夫人　薄か。

薄　立派な方でございます。

夫人　今まで、あの人を知らなかった、目の及ばなかった私は恥かしいよ。

薄　かねてのお望みに叶うた方を、何でお帰しなさいました。

夫人　生命が欲い。抵抗をすると云うもの。

薄　御一所に、ここにお置き遊ばすまで、何の、生命をお取り遊ば

すのではございませんのに。

夫人　あの人たちの目から見ると、ここに居るのは活きたものではないのだと思います。

薄　それでは、貴方の御容色と、そのお力で、無理にもお引留めが可うございますのに。何の、抵抗をしました処で。

夫人　いや、容色はこちらからは見せたくない。力で、人を強いるのは、播磨守なんぞの事、真の恋は、心と心、……（軽く）薄や。

薄　は。

夫人　しかし、そうは云うものの、白鷹を据えた、鷹匠だと申すよ。——縁だねえ。

薄　きっと御縁がございますよ。

夫人　私もどうやら、そう思うよ。

薄　奥様、いくら貴女のお言葉でも、これはちと痛入りました。

夫人　私も痛入りました。

薄　これはまた御挨拶でございます——あれ、何やら、御天守下が騒がしい。（立って欄干に出づ、遥に下を覗込む）……まあ、御覧なさいまし。

夫人　（座のまま）何だえ。

薄　武士が大勢で、篝を焚いております。ああ、武田播磨守殿、御出張、床几に掛ってお控えだ。おぬるくて、のろい癖に、もの見高な、せっかちで、お天守見届けのお使いの帰るのを待兼ねて、推出したのでございます。もしえもしえ、図書様のお姿が小さく見えます。奥様、おたまじゃくしの真中で、御紋着の御紋も河骨、すっきり花が咲いたような、水際立ってお美しい。……奥様。

夫人　知らないよ。

薄　おお、兜あらためがはじまりました。おや、吃驚した。あの、殿様の漆みたいな太い眉毛が、びくびくと動きますこと。先刻の亀姫様のお土産の、兄弟の、あの首を見せたら、どうでございましょう。ああ、御家老が居ます。あの親仁も大分百姓を痛めて溜込みましたね。そのかわり頭が兀げた。まあ、皆が図書様を取巻いて、お手柄にあやかるのかしら。おや、追取刀だ。何、何、何、まあ、まあ、奥様々々。

夫人　もう可い。

薄　ええ、もう可いではございません。図書様を賊だ、と言います。御秘蔵の兜を盗んだ謀逆人、謀逆人、殿様のお首に手を掛けたも同然な逆賊でございますとさ。お庇で兜が戻ったのに。——何てまあ、人間というものは。——あれ、捕手が掛った。忠義と知行で、てむかいはなさらぬかしら。しめた、投げた、嬉しい。そこだ。御家老が肩衣を撥ましたよ。大勢が抜連れた。あれ危い。豪い。図書様抜合せた。……一人腕が落ちた。あら、胴切。また何も働かずとも可いことを、五両二人扶持らしいのが、あら、可哀相に、首が飛びます。

夫人　秀吉時分から、見馴れていながら、何だねえ、騒々しい。

薄　騒がずにはいられません。多勢に一人、あら切抜けた、図書様がお天守に遁込みました。追掛けますよ。槍まで持出した。（欄干をするすると）図書様が、二重へ駈上っておいでなさいます。大勢が追詰めて。

夫人　（片膝立つ）可し、お手伝い申せ。

薄　お腰元衆、お腰元衆。——（呼びつつ忙しく階子を下り行く。）

夫人、片手を掛けつつ几帳越に階子の方を瞰下す。

――や、や、や、――激しき人声、もの音、足踏。――

図書、もとどりを放ち、衣服に血を浴ぶ。刀を振って階子の口に、一度屹と下を見込む。肩に波打ち、はっと息して※となる。

夫人　図書様。

図書　（心づき、蹌踉と、且つ呼吸せいて急いで寄る）姫君、お言葉をも顧みず、三度の推参をお許し下さい。私を賊……賊……謀逆人、逆賊と申して。

夫人　よく存じておりますよ。昨日今日、今までも、お互に友と呼んだ人たちが、いかに殿の仰せとて、手の裏を反すように、ようまあ、あなたに刃を向けます。

図書　はい、微塵も知らない罪のために、人間同志に殺されましては、おなじ人間、断念められない。貴女のお手に掛ります。――御禁制を破りました、御約束を背きました、その罪に伏します。速に生命をお取り下されたい。

夫人　ええ、武士たちの夥間ならば、貴方のお生命を取りましょう。私と一所には、いつまでもお活きなさいまし。

図書　（急きつつ）お情余る、お言葉ながら、活きようとて、討手の奴儕、決して活かしておきません。早くお手に掛け下さいまし。貴女に生命を取らるれば、もうこの上のない本望、彼等に討たるるのは口惜い。（夫人の膝に手を掛く）さ、生命を、生命を――こう云う中にも取詰めて参ります。

夫人　いいえ、ここまでは来ますまい。

図書　五重の、その壇、その階子を、鼠のごとく、上りつ下りつい たしおる。……かねての風説、鬼神より、魔よりも、ここを恐しと存じておるゆえ、いささか躊躇はいたしますが、既に、私の、かく参ったを、認めております。こう云う中にも、たった今。

夫人　ああ、それもそう、何より前に、貴方をおかくまい申しておこう。（獅子頭を取る、母衣を開いて、図書の上に蔽いながら）この中へ……この中へ――

図書　や、金城鉄壁。

夫人　いいえ、柔い。

図書　仰の通り、真綿よりも。

夫人　そして、確かり、私におつかまりなさいまし。

図書　失礼御免。

夫人の背よりその袖に縋る。縋る、と見えて、身体その母衣の裾なる方にかくる。獅子頭を捧げつつ、夫人の面、なお母衣の外に見ゆ。

討手どやどやと入込み、と見てわっと一度退く時、夫人も母衣に隠る。ただ一頭青面の獅子猛然として舞台にあり。

討手。小田原修理、山隅九平、その他。抜身の槍、刀。中には仰山に小具足をつけたるもあり。大勢。

九平　（雪洞を寄す）やあ、怪しく、凄く、美しい、婦の立姿と見えたはこれだ。

修理　化るわ化るわ。御城の瑞兆、天人のごとき鶴を御覧あって、殿様、鷹を合せたまえば、鷹はそれて破裳を投落す、……言語道断。

九平　他にない、姫川図書め、死ものぐるいに、確にそれなる獅子母衣に潜ったに相違なし。やあ、上意だ、逆賊出合え。山隅九平向うたり。

修理　待て、山隅、先方で潜った奴だ。呼んだって出やしない。取

って押え、引摺出せ。

九平　それ、面々。

修理　気を着けい、うかつにかかると怪我をいたす。元来この青獅子が、並大抵のものではないのだ。伝え聞く。な、以前これは御城下はずれ、群鷲山の地主神の宮に飾ってあった。二代以前の当城殿様、お鷹狩の馬上から――一人町里には思いも寄らぬ、都方と見えて、世にも艶麗な女の、一行を颯と避けて、その宮へかくれたのを――とろんこの目で御覧じたわ。此方は鷹狩、もみじ山だが、いずれ戦に負けた国の、上※、貴女、貴夫人たちの落人だろう。絶世の美女だ。しゃつ掴出いて奉れ、とある。御近習、宮の中へ闖入し、人妻なればと、いなむを捕えて、手取足取しようとしたれば、舌を噛んで真俯向けに倒れて死んだ。その時にな、この獅子頭を熟と視て、あわれ獅子や、名誉の作かな。わらわにかばかりの力あらば、虎狼の手にかかりはせじ、と吐いた、とな。続いて三年、毎年、秋の大洪水よ。何が、死骸取片づけの山神主が見た、と申すには、獅子が頭を逆にして、その婦の血を舐め舐め、目から涙を流いたというが触出しでな。打続く洪水は、その婦の怨だと、国中の是沙汰だ。婦が前髪にさしたのが、死ぬ時、髪をこぼれ落ちたというを拾って来て、近習が復命をした、白木に刻んだ三輪牡丹高彫のさし櫛をな、その時の馬上の殿様は、澄して袂へお入れなさった。祟を恐れぬ荒気の大名。おもしろい、水を出さば、天守の五重を浸して見よ、とそれ、生捉って来てな、ここへ打上げたその獅子頭だ。以来、奇異妖変さながら魔所のように沙汰する天守、まさかとは思うたが、目のあたり不思議を見るわ。――心してかかれ。

九平　心得た、槍をつけろ。

　討手、槍にて立ちかかる。獅子狂う。討手辟易す。修理、九平等、抜連れ抜連れ一同立掛る。獅子狂う。また辟易す。

修理　木彫にも精がある。活きた獣も同じ事だ。目を狙え、目を狙え。

　九平、修理、力を合せて、一刀ずつ目を傷く、獅子伏す。討手その頭をおさう。

図書　（母衣を撥退け刀を揮って出づ。口々に罵る討手と、一刀合すと斉しく）ああ、目が見えない。（押倒され、取って伏せらる）無念。

夫人　（獅子の頭をあげつつ、すっくと立つ。黒髪乱れて面凄し。手に以前の生首の、もとどりを取って提ぐ）誰の首だ、お前たち、目のあるものは、よっく見よ。（どっしと投ぐ。）

　――討手わッと退き、修理、恐る恐るこれを拾う。

修理　南無三宝。

九平　殿様の首だ。播磨守様御首だ。

修理　一大事とも言いようなし。御同役、お互に首はあるか。

九平　可恐い魔ものだ。うかうかして、こんな処に居べきでない。

　討手一同、立つ足もなく、生首をかこいつつ、乱れて退く。

図書　姫君、どこにおいでなさいます。姫君。

　夫人、悄然として、立ちたるまま、もの言わず。

図書　（あわれに寂しく手探り）姫君、どこにおいでなさいます。

夫人　私は目が見えなくなりました。姫君。

図書　ええ。

夫人　（忍び泣きに泣く）貴方、私も目が見えなくなりました。

夫人　侍女たち、侍女たち。――せめては燈を――

――皆、盲目になりました。誰も目が見えませんのでございます。――（口々に一同はっと泣く声、壁の彼方に聞ゆ。）

夫人　（獅子頭とともにハタと崩折る）獅子が両眼を傷つけられました。この精霊で活きましたものは、一人も見えなくなりました。図書様、……どこに。

図書　姫君、どこに。

さぐり寄りつつ、やがて手を触れ、はっと泣き、相抱く。

夫人　何と申そうようもない。貴方お覚悟をなさいまし。今持たせてやった首も、天守を出れば消えましょう。討手は直ぐに引返して参ります。私一人は、雲に乗ります、風に飛びます、虹の橋も渡ります。図書様には出来ません。ああ口惜い。あれら討手のものの目に、蓑笠着ても天人の二人揃った姿を見せて、日の出、月の出、夕日影にも、おがませようと思ったのに、私の方が盲目になっては、ただお生命さえ助けられない。堪忍して下さいまし。

図書　くやみません！　姫君、あなたのお手に掛けて下さい。

夫人　ええ、人手には掛けますまい。そのかわり私も生きてはおりません、お天守の塵、煤ともなれ、落葉になって朽ちましょう。

図書　やあ、何のために貴女が、美しい姫の、この世にながらえておわすを土産に、冥土へ行くのでございます。

夫人　いいえ、私も本望でございます、貴方のお手にかかるのが。

図書　真実のお声か、姫君。

夫人　ええ何の。――そうおっしゃる、お顔が見たい、ただ一目。

……千歳百歳にただ一度、たった一度の恋だのに。

図書　ああ、私も、もう一目、あの、気高い、美しいお顔が見たい。

（相縋る。）

夫人　前世も後世も要らないが、せめてこうして居とうござんす。

図書　や、天守下で叫んでいる。

夫人　（屹となる）口惜しい、もう、せめて一時隙があれば、夜叉ヶ池のお雪様、遠い猪苗代の妹分に、手伝を頼もうものを。

図書　覚悟をしました。姫君、私を。……

夫人　私は貴方に未練がある。いいえ、助けたい未練がある。

図書　猶予をすると討手の奴、人間なかまに屠られます、貴女が手に掛けて下さらずば、自分、我が手で。――（一刀を取直す。）

夫人　切腹はいけません。ああ、是非もない。それでは私が御介錯、舌を噛切ってあげましょう。それと一所に、胆のたばねを――この私の胸を一思いに。

図書　せめてその、ものをおっしゃる、貴方の、ほのかな、口許だけも、見えたらばな。

夫人　貴方の睫毛一筋なりと。（声を立ててともに泣く。）

奥なる柱の中に、大音あり。――

――待て、泣くな泣くな。――

工人、近江之丞桃六、六十じばかりの柔和なる老人。頭巾、裁着、火打袋を腰に、扇を使うて顕る。

桃六　美しい人たち泣くな。（つかつかと寄って獅子の頭を撫で）まず、目をあけて進ぜよう。

火打袋より一挺の鑿を抜き、双の獅子の眼に当つ。

――夫人、図書とともに、あっと云う――

桃六　どうだ、の、それ、見えよう。ははは、ちゃんと開いた。嬉しそうに開いた。おお、もう笑うか。誰がよ誰がよ、あっはっ

はっ。

夫人　お爺様。

図書　御老人、あなたは。

桃六　されば、誰かの櫛に牡丹も刻めば、この獅子頭も彫った、近江之丞桃六と云う、丹波の国の楊枝削よ。

夫人　まあ、（図書と身を寄せたる姿を心づぐ）こんな姿を、恥かしい。

図書も、ともに母衣を被ぎて姿を蔽う。

桃六　むむ、見える、恥しそうに見える、極りの悪そうに見える、がやっぱり嬉しそうに見える、はっはっはっはっ。睦じいな、若いもの。（石を切って、ほくちをのぞませ、煙管を横銜えに煙草を、すぱすぱ）気苦労の挙句は休め、安らかに一寝入さっせえ。そのうちに、もそっと、その上にも清い目にして進ぜよう。

鑿を試む。月影さす。

そりや光がさす、月の光あれ、眼玉。（鑿を試み、小耳を傾け、鬨のごとく叫ぶ天守下の声を聞く）

世は戦でも、胡蝶が舞う、撫子も桔梗も咲くぞ。――馬鹿めが。（呵々と笑う）ここに獅子がいる。お祭礼だと思って騒げ。（鑿を当てつつ）槍、刀、弓矢、鉄砲、城の奴等。

――幕――

大正六（一九一七）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
　　1995（平成7）年12月4日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十六巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月15日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：染川隆俊
2006年9月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天守物語

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/